

「人生100年時代、いつでもどこでもチャレンジ」

第1分科会

コーディネーター：沖藤 典子(NPO法人高齢社会をよくなる女性の会 副理事長)

パネリスト：時田 純(社会福祉法人小田原福祉会潤生園 理事長)

富安 兆子(高齢社会をよくなる北九州女性の会 代表)

青森 千枝美(伊豆・松崎・であい村 蔵ら 代表理事)

〈要旨〉

第1分科会では、「人生100年時代、いつでもどこでもチャレンジ」をテーマに、平均年齢85.7歳のパネリスト3名による社会活動の発表が行われた。

満91歳になる潤生園理事長、時田さまからは、ご自身の生い立ちから人生における四つのチャレンジを発表いただき、現在も運営されている「高齢者介護安心システム」について発表いただいた。続いて、高齢社会をよくなる北九州女性の会代表の富安さまからは、従来の血縁、地縁を超えた平等な関係性を基盤とする新しいコミュニティの創造に向けた子育て支援活動を発表いただくとともに、人口減少と少子高齢社会の先頭を歩む日本の取組みが、今後同じプロセスをたどる世界の多くの国にとって、より良きモデルになるであろうという意見も出された。最後に伊豆・松崎・出合い村・蔵らの代表理事の青森さまからは、「町おこしのお手伝い」、「高齢者が生きがいを持って働く、活動できる場所づくりと働き場づくり」、「高齢者の居場所づくり」をテーマに組合形式で運営する「ものづくり介護」の活動について発表いただいた。

グループディスカッションでは主に、男性の社会参加、地域参加について働きかけようという意見や、ボランティアの高齢化問題に対し後継者をどのようにつくるのか、資金不足に悩んでいるといった課題が出された。また、コーディネーターの沖藤さまからは、社会活動年齢、社会活動寿命を延ばしていくことがこれから大切といった意見が出された。



【沖藤】

皆さま、この第1分科会にお集まりくださりまして本当にありがとうございます。この分科会のテーマは『人生100年時代、いつでもどこでもチャレンジ』ということでございます。先ほど清家先生のご講演の中で、健康寿命を延ばしていくことや職業寿命を延ばすというお話がありましたが、さらにもう一步、社会活動寿命を延ばす、これもまた重要なテーマではないかと思いながら拝聴しておりました。きょう、ここにお集まりの3人のかたがたは、その社会活動歴、燦燦たるかたがたでございます。

ご紹介の前に、時間配分を申し上げたいと思います。この分科会の与えられている時間は120分です。2時間。例年お越しの方はご記憶あると

思うんですが、2時間半だったんですが今年から2時間に縮まりました。それで、どう進行するか大変悩みました。はじめに70分パネルディスカッションを行います。その後50分ぐらい、10人程度のグループに分かれましてグループ討議、いわゆるバズセッションというものをいたします。さらにその後、また、そのグループの中のどなたか代表の方がお立ちくださりまして、どういう議論があったかということを発表させていただきます。こういうやり方になっておりますので、トイレ休憩はございません。ですから、ご用の方はお静かにお立ちになってくださいませ。それではパネルディスカッションを始めます。ここに並んでおります3人それぞれの肩書等につきましては、皆さまお手持ちの資料の中にあるかと思っております。この3人の平均年齢が実に85.7歳なんでございます。1人、ちょっと平均年齢を上げられた方がおられまして。

そういう、そうそうたる社会活動歴、寿命を歩んでおられる3人でございます。江戸時代中頃、与謝蕪村という俳人がおられて、こういう俳句を詠んでおります。「麦蒔きや百まで生きる兒ばかり。」ここにおります3人、それから皆さまがたも含めて、どの方も100歳までどころか、100超えですね。100超えて生きる顔ばかりという、たくましい面構えでございます。

3人に順次15分程度、発言していただきます。最初に時田純先生お願いいたします。先生のご略歴等はお手持ちの資料の中にあるかと思いますが、とにかく元気な方です。お生まれになったときに大変な未熟児で「この子はもう育たない」と言われたそうです。その子がなんと延々と91年、社会に大きな影響を与えながらご活動をなさってこられました。そういう、元気な時田さんでございます。どうぞよろしく願いいたします。拍手で皆さまお迎えいただきますようお願いいたします。

【時田】

ただ今ご紹介をいただきました『社会福祉法人小田原福祉会』の時田と申します。最初に、このフォーラムにご推薦くださいました『高齢社会をよくする女性の会』の樋口先生、感謝を申し上げます。また、沖藤先生、丁寧なご紹介をありがとうございます。それでは座らせていただきます。

私は1927年に東京の日本橋で生まれました。未熟児で生まれたそうです。現在、満91歳の現役のソーシャルワーカーでございます。24歳からこれまでソーシャルワーカーとして福祉、介護に携わってまいりました。今も毎日、楽しく働いております。私ごとですが今も入れ歯は1本もありません。

骨密度は60代だそうでございます。まだしばらくは働けるだろうと思います。私の長い人生には、これまで大きく4回チャレンジがございました。きょうはその経験をお話させていただきます。

私が生まれた当時の時代背景でございます。ご高齢の方もたくさんいらっしゃいますからご自身のご経験にもなるかと思いますが、人生は、まさにその人が生きる時代の気候現象、世界、国内の政治経済、家族の構成や健康状態まで含めたさまざまな要件に左右されるわけでございます。

私が生まれる15年ほど前まで日本は農業国家でございました。しかも経済全体に占める農業の割合が大きくて、地主制の下で小作農中心の農業でしたから、全体的に非常に貧しい時代であったとご理解をいただきたいと思います。国内では安定した職業があまりなかったわけでございます。それが第1次世界大戦が始まって戦争による特需が起きます。工業が発達を始めます。未曾有の好景気になりまして工業生産額が農業生産を初めて上回ったという時代背景がございました。

しかし大戦の特需景気が終わって生産活動が低下し経済が悪化します。そして慢性的な大不況に陥りました。さらに1920年の株式市場の大暴落により、世界的に景気は悪化をし、庶民生活は長い苦境が続いていたのでございます。

一方、当時の日本の政治状況は1921年に総理大臣が暗殺をされる。そこに関東大震災が2年後に起きます。そして社会の混乱が著しくて、私が5歳のときに陸軍の反乱による5.15事件が起き、続いて9歳のときに同じく2.26事件が起きます。非常に不安な社会でございました。

10歳のときに日中戦争の発端になった盧溝橋事件が起き、12歳のときに第2次世界大戦が勃発をします。まさに戦争の時代を生きた青春時代でございました。私は18歳のときに単身、満州の国立建国大学へ進学をいたしました。しかし終戦間際にソ連軍が国境を越えて侵略をしてまいりましたので、大学の全学生に召集令状がまいりました。いきなり戦場に駆り出されて、天皇の詔勅が1日遅れれば死んでいたという、運命でありました。そのような経験から、人間生命の尊厳を無視し、民は知らしむべからず、由らしむべしという封建主義は国民を不幸にする、そのことを肝に銘じてその後の私の人生観を決定づけたのでございます。国が情報をクロウズすることがどれほど危険か。私が満州へ渡る頃にはもう既に敗戦の色が濃かったわけでございますし、満州国が滅亡するという



未曾有の事態に陥るわけですが、知らずに入学したためにどれほど苦難にあったか。その後、2年間の抑留生活を経て日本へ引き上げてまいりましたが、なんと終戦の前日に我が家が空襲で焼けていたという、ひどい運命でございました。戦争ほど悲惨なものはない愚かなものはないということを、肝に銘じたのでございます。



●第2のチャレンジ

第2のチャレンジは、昭和24年、市役所にソーシャルワーカーとして就職をいたしました。生活保護の受給者の方の保護費を支給するのが最初の仕事でございました。その後、戦後の復興事業に携わりました。市営住宅の建設をします。その次に国民健康保険の創設をします。まだ健康保険がなかった時代でございますから、先ほど清家先生のお話でもあったように乳幼児の死亡率が非常に高かった。そういう時代に、アメリカのGHQの指導で、早く国民健康保険を作らなくては行けない、そういうことで私が担当させていただいて幸いにこれは成功いたしました。

その次に市立病院の建設をいたします。当時はドイツの医療からアメリカの医療に大転換する時代でございました。国立東京第1病院の中に国立病院管理研究所というのがありました。そこに2年間、病院管理学を学びに小田急で通いました。幸い、これも成功体験を収めました。

このようにして約14年間、福祉行政を経験いたしまして、社会福祉へ献身する将来の端緒になったわけでございます。

29歳のときに仏教を知る機会がございまして、生涯の学習を自覚いたしました。法華経という釈迦の經典に『法に依って人に依らざれ』という言葉があります。人の言葉ではなくて、法によらなくては行けないという人生の根本の羅針盤を得て生きる目的と自己実現の目標を知りました。36歳のときに推されて市会議員に当選し、以来12年間務め、その間に多くの特養ホームを見学する機会がございました。当時の老人福祉は大変な時代でした。一つの部屋に8人、10人と詰め込んだ、そういう老人福祉の実態でした。人権無視は著しい状況でした。なんでこんな状況なんだろうと疑問におもいました。実は在宅はもっとひどかったのです。大きな床擦れを作った老人が5年も6年もお風呂に入ったことがない、そういう不潔な状態で、在宅のお年寄りたちが苦しんでいた時代でございます。その間、国会議員の秘書を10年兼務をいたしました。

●第3のチャレンジ

次に第3のチャレンジでございます。48歳から3年間、全国社会福祉協議会研修センターという所で、社会福祉制度を体系的に学び直しました。そして、1977年、50歳で生命の宣言を基調にした「人は人として存在するだけで尊い」という理念を掲げ、社会福祉法人を設立し、翌年、特養ホーム潤生園を創設いたしました。

先ほど申し上げたとおり、在宅から施設にお入りになるお年寄りたちは、こんな大きな床擦れを作り、もう骨まで達するような緑膿菌で汚染された大変ひどいお年寄りたちをお受けしました。その方たちの褥瘡を治したり、寝たきりのお年寄りたちを起こしていく。認知症のお年寄りの背景にある栄養障害を改善していく。そして、おむつを外し排せつの自立を支援して、全員ベッドから起こすことに専念したのです。そして人間性の回復を図りました。当時の特養ホームは、例えばJR線から見える老人ホームがありました。その施設の屋根には寝たきり老人ホームと書いてありました。今では考えられませんが、そういう老人福祉の実態でございました。

1979年、特養ホームを造ったすぐ翌年から在宅の寝たきり老人の施設入浴と、そして宿泊のサービスを無償のボランティアで開始をいたしました。これが後のデイサービスであり、またショートステイとして制度化をされていったわけでございます。また、認知症の人の評価スケールを独自に開発いたしました。その結果、神奈川県内の特養で第1号の認知症専門施設の指定を受けたのでございます。

●第4のチャレンジ

そのようにして第3次から第4のチャレンジへ向かってまいります。90年には365日、昼夜2食の配食サービスをボランティアで開始いたします。年間で約700万円の赤字を出しながらボランティア活動を続けました。そして翌年に嚥下障害の方の「介護食」を研究開発し、日本栄養改善学会から学会賞を受けたのでございます。また、次の年、神奈川県初の毎日型24時間の訪問介護事業を創設し、その次の年、全国初のホームヘルパー1級養成研修事業を施設の中で開始しました。少し飛びますが、14年ほどたった当時、深夜、あるいは早朝の訪問介護はない時代に初めて夜間対応型訪問介護を作り、これを政府が後に制度化をいたしました。

私は2008年5月に24時間在宅ケア研究会を結成し、その理事長として10年間、全国定期的な推進に努めてまいりました。また、2008年に日本認知症ケア学会から読売認知症ケア功労賞を授与されました。そして2012年に、定期巡回随時対応型訪問介護を創設しました。これは1日に必要な都度訪問し、特に退院をしてくるお年寄りたちが、在宅で不安なく生活できるように、サービスを提供していく。それによってスムーズに医療機関から在宅へ受け入れるという、そのような仕事を進めたわけでございます。

60歳のとき、法華経という経典の中に「人間は人間でなければできないことをするために人間に生まれた」という釈迦の言葉があります。その示唆によって私は介護へ生涯献身するという使命を自覚いたしました。きょう、1枚の絵がお手元に渡っていると思います。

これが、現在、私どもが地域展開をしている事業です。要介護高齢者が在宅で暮らし続けるためのサービスを、作り上げてまいりました。私は「高齢者介護安心システム」と言っておりますが、これが地域包括ケアシステムそのものであると思います。



【富安】

皆さま、こんにちは。折あしく風邪気味でお聞き苦しいと思いますけれどもお許してください。前段15分でという厳密な指令が来ておりますが、年とともに話が長くなっておりますので15分で終える自信がございません。それで大体12分で終わる映像中心のスライドショーの形につくって参りました。スライドショーが終わったときに私の話が終わってれば15分という約束は守れると。

皆さまのお手元の資料の中に、ピンクのリーフレットがございます。

それと、きょう、配られました1枚もののA4の紙があると思いますが、このA4の部分を生でしゃべります。なので、皆さまは映像をご覧になって、こんなことをやってきたんだなということをイメージしていただきながら私どもの活動の特徴はどこにあるのかを、この文章で捕まえていただければ、と思います。

もう一枚の簡単なレジユメのほうに、今日の私の発題の流れをお示しています。1は「映像を通して見る会活動のあらまし」です。

「会の立ち上げに至る問題意識」につきましては、このリーフレットに会の設立の目的とか趣旨とか書いてございますので読んでいただいたら分かります。3番目、「会活動の特徴」ですが、ここに五項目を挙げておきました。

何しろ立ち上げたときに1985年、もう33年前の話でございますので、その頃はまだ日本の高齢化率は、7パーセントぐらいでした。きょう、清家先生のお話に、「学者は奴雁になるべきだ」という福澤諭吉さんの言葉がありました。今、思えば、学者ではございませんけれども、奴雁という、先を見ながら、これからどんなふうに取り組んでいくべきかを考えて、それをみんなで実践してきた、と言えるかなと、あらためてきょうは総括ができてよかったと思っております。

●血縁、地縁を超えた平等な関係性を基盤とする新しいコミュニティの創造がテーマ

ここに書いてあります3番目、「会活動の特徴」ですが、第1の特徴としては従来の血縁、地縁を超えた平等な関係性を基盤とする新しいコミュニティの創造をテーマとしています。ご紹介いただいたように私は伊豆の修善寺という所で生まれ育っております、子どもの頃は、18歳まで生きられるかどうか分からないという大変な虚弱児、大風の吹く日に外に出すと転がっていきそうと言われたぐらいですが、今このように、まだ、たくましく生きております。人生100年時代と言われますけれども、私は2037年まで生きる予定になっておりますので、あと18年か19年くらいはそれなりに頑張らないといけないと思ひながら暮らしております。

●女性たちの不満をプラスにつなげていこうというのが立ち上げのきっかけ

そういうテーマを持ちまして、40代から60代の普通の女性を中核に新しい社会連帯を生み出したいという、理想だけは壮大な出発でございました。それまでも職能団体はいろいろありましたが、普通の人々、その頃、「般ピー」という言葉がはやりましたが、一般ピープルつまり、普通の女性たちが、それまで仕事はしていたとしても結婚して家庭に入って、家族の世話で追われて、そして一生を終るといふ、その中で、実はたくさんの不平不満を聞いてまいりました。

私はPTAが社会活動の始まりなんです、夫の赴任で鹿児島に参りまして9年、子ども2人を出産し、子どもの幼稚園や何かの世話をして、その後、北九州に移りました。社会教育活動を一方でしておりましたから、女性たちの間でこんなに勉強させられて一体どうしてくれるの？というような不満が渦巻いているのを見聞きしていました。そこで、そういう不満になるような女性のエネルギーを何とかプラスにつなげていきたいということが、組織を立ち上げる一つのきっかけだったわけです。

そういうことで学習活動をベースにおいて、問題の所在を明らかにしながら、さまざまな運動を展開してきましたけれども、いまだに



運動のレベルを超えていないというのは、代表である私はもとよりのこと、理事の皆さんも無給であるにもかかわらず、事業のお金も、4000万～5000万の単位で動いています。それを越えるお金が出ていくという意味では、やはり時田先生が始められたときのように赤字でございます。その赤字分を映画会や、その他さまざまなことをして稼ぎ出しながら、したいと思うことをやっているというのが実情です。高齢者の身辺介助や話し相手などの、つまり家族に替わる家族としての働きも大事にしてきて、そして、これらのサービスの受け手はもちろん高齢者なのですが、一方でサービスを提供する側も高齢者というところに大きな意味があると思って、そのようにやってきました。

●行政が手付かずだったことを行ってきた

第2の特徴は、社会の高齢化はやがて少子化によって一層加速されるという認識が当初からありましたから、女性のリプロダクティブ・ライツ/ヘルスを擁護しつつ、生まれてくる子どもがすくすくと成長するための子育て支援活動をしていることです。20年前はまだ行政でもそういうことは手付かずでし、**「こういうことが必要だ」と行政の担当者に言っても「予算がありません」「財政がウンと言いません」というような形で取り合ってもらえない。行政がやらないなら私たちでやるしかないというので、配食活動もそうですが、ありとあらゆる思い付くことをやってきたわけです。**

その頃、家族が特に母親が子どもに密着し過ぎるあまり、さまざまな悲劇が起きていました。ですので、他人だからこそできる程よい距離での関わり、人間的な関わりが必要だと考えて『グランマ』活動が始まりました。会が発足して10年目のことで、現在も続いています。

●高齢者が蓄積してきたさまざまな経験と知恵を次世代育成のために生かしている

第3の特徴は高齢者の資源を次世代育成のために生かしていること。高齢者のためにお金を使い過ぎだという議論がこのところ、盛んに行われますけれども、高齢者がこれまでどれだけ若い人たちのために自分の資源を使ってきたでしょうか。この辺の経験をぜひどこかがきちんと数字として研究して下さるといいないつも考えています。そういう意味では新しい関わりを地域社会に生み出すことがとても必要なので、核家族化現象の中で閉鎖的であればあるほど密着しがちな、だからこそ問題をはらんだ親子関係が生じる傾向が強い、そういう時代に、子どもの自立、親の自立を射程に入れた子育て支援は親身な他人だからこそ可能だと思います。生まれたばかりの赤ちゃんが私どもの活動で『グランマ』と関わりを持ちながら、成人式を迎えましたとか、結婚式を迎えましたとかいう形で長いお付き合いが続いているのも私どもの活動の特徴と言えるかと思います。第3の特徴は、つまり、高齢者が蓄積してきたさまざまな経験と知恵を個人的な血縁の範囲で終わらせるのではなくて、社会的な子育てに生かせば新しい関わりを地域社会に生み出すことになる。核家族化現象の中で閉鎖的であればあるほど問題をはらみがちな関係性を、開かれた地域社会にするための新しい関係性に転換することがとても大事な課題だという認識があったからでした。

●地域の活動が全国的な組織を通し集約され意味のある活動に

第4番目。本会の主体的な活動が高齢者の生きがいをつくりだすということも大きな目的の一つでした。『グランマ』を通しての活動もそうですが、一方で学習活動を大切にすると同時に、介護保険が入るときもアンケートを集めたり署名活動をしたり、と積極的に動きました。幸いなことに『高齢社会をよくする女性の会』という、女性が主体的に活動する全国的な組織があることを通して私どもの地域でのささやかな活動も全体に集約されて、それなりの意味のある活動になっていく。これはとても大きな意味を持っていると私は今もそう思っています。

●活動を通し社会経済活動にかかわっている

5番目。会員が活動を通して社会経済活動に関わっていること。こうした生涯学習や実践の普及とともに、個々人の能力も当然向上しているのですから、こうして一人当たりの生産性が高まれば、経済的にも、時間、空間的にもゆとりのある、より人間らしい暮らしの営める社会になる可能性は高いと思っています。人口減少と少子高齢化の先頭を歩む日本は、恐れずに課題に勇敢に取り組む

ことを通して、遅かれ早かれ同じプロセスをたどる世界の他の多くの国、特に高齢化後発国のアジアやアフリカの国々にとっての良きモデルとなるであろうと思っています。

●次世代が高齢社会をそれなりの希望を持って迎えられる社会にして いきたい

清家先生の最後のほうのお話に、「日本が世界のよきモデルになる」とありました。私がこの骨子を書いたのは清家先生のおっしゃる以前のことで、清家先生の真似ではございませんが、今こそ私たちはよきモデルとして、そして次の世代が高齢社会をそれなりの希望を持って迎えられる

ような、だからこそ今を一生懸命生きていこうと思える社会にしていきたいと、大それた考えではありませんけれども、そう考えております。

●理論武装して理論的に迫る

もう一つ、調査研究、これも私どもの会のとても大きな課題でありまして、会員さんたちがこんなことで困っている、こんなことが心配だというようなことがありましたら、じゃあ、その実態をまず調査してみよう。というのは、行政に掛け合っても「お金がありません」というのが最初の担当者の答で、私はウルトラCを使って上から下へというのはどうも性に合いませんので、現場の担当者を説得するためには理論武装して迫るしかないと考えました。

例えば、保育園でも、「こんなにちゃんとやっています」か言いますが、写真を撮って、ご覧のとおり「こんな状況で子どもたちは保育園に通っていますよ」とか、あるいは「学童保育の状況はこうですよ」とか、実際に調査したものを基に持っていきますと、これはもう、ぐうの音も出ないで、次の次ぐくらいのところで政策課題として上がってくるという、そういう意味では大変面白い実験をいろいろ、この33年間でさせていただいたと考えております。

●国際化の動きの中で

お隣の韓国でもウルサンとかテジョン北九州と似た土地柄の工業型社会でありまして、北九州市と共通した課題を持っていますので、あちらから、話に来てほしいとか、こちらの様子も知りたいとかいうこともあって、いろんな関わりが生まれています。そういう意味では、韓国だけではございませんけれども、私が国外に出たりしたときのつながりなどを基に、できるだけ北九州の、北九州がもちろん出発点ですし、北九州が一つの大きな舞台ではありますが、北九州にとどまらず日本全体に、あるいは世界の必要とする地域にこうした情報を届けられたらなと思って活動を続けてまいりました。

46歳のときインドに女性問題の調査に行った折、「聖者」と言われる方に「あなたはあと、57年生きる」というご託宣を受け、数えてみたら103になるわけで、そんなことがあるはずがないと思ひまして日本に帰っていろいろ調べましたら、103ぐらいは軽いという可能性が出てきました。それで、2037年の誕生月の3月にちょうど人生が終わるよう精一杯生きていけたらいいなと思っております。



【青森】

皆さま、こんにちは。一昨年(2019年)の10月3日に樋口先生と出会いまして、そのときに私も大腿骨を骨折してまして車いす、先生も8度5分以上の熱を出されて、本当に痛々しいトークセッションで出会いました。そのときに『人生100年時代』というお話を伺って、今まで、私もそろそろ終わりがかなと思ってたのが、また勇気をいただいて、もう少し頑張ってみようかなと思ってたところで、このたびこのような光栄な所でお話させていただくことは本当にうれしいというかどきどきしてますけど、皆さんよろしくお祈りします。



●ずっと考えていた『ものづくり介護』を組合形式で経営

松崎町は静岡県で一番小さな町なんです。人口が6700ほどですね。高齢化率は40パーセント、4人に1人は高齢者ってことで、高齢者が元気でないと町が成り立たない、そういう町づくりです。自然と、山があり海があり川があり、歴史、文化、本当に穏やかな町なので、みんな、ゆったりとした気持ちで温泉に入っているような気持ちでいるんです。そこで私は15年ほどずっと考えていたことが今やっと日の目を見ているんですけど、『ものづくり介護』なんです。女性はものづくりが大好きなので、それで何とか元気にしようっていうところから始まったのが『蔵ら』の始めなんです。

どういふうに経営していくかというときに、ワーカーズコレクティブという組合形式で、生協とか、農業協同組合とか、漁業協同組合とかそういう組合なんです。そういう所の事務をやっていた人が、この指止まれで集めたとき25人の中に1人いらして、じゃあワーカーズ方式でやろうということで、これは雇うとか雇われるとかそういう関係ではなく働く者同士がみんなで出資して、ですから、うちは25人全部が社長なんです。たまたま私が一番年が上なので、一応、理事長となっていますけど、みんな社長なんです。

「ゆめのはな」の近くにある
帯広市の開拓に尽力した、偉人の依田勉三氏の
ゆかりのある築150年になる住居と蔵を取り壊す
と言う話を聞く。

町の偉人のゆかりのある建物を守りたい。
この場所を高齢者の集える「居場所」にしたら・・・



「ゆめのはな」で知り合った25人の地域住民で出資
をして、ワーカーズ・コレクティブ方式で運営を始める
ことになる。

ちなみに

ワーカーズ・コレクティブとは

雇うー雇われるという関係ではなく、
働く者同士が共同で出資して、
それぞれが事業主として対等に働く
労働者協同組合のことです。

居場所としての『蔵ら』の役目としては、月水土日4日間は日替わりの軽食としてお食事を出しております。その他、火、金は視察研修など、また、『ものづくり介護』ですから、いろいろ、子どもからおばあちゃんおじいちゃんまでがやれること、手作りのものを講習しております。それぞれ先生が替わってやっております。一番高齢が99歳のおばあちゃんが先生になってやっております。あとは皆さんが作ったもの、リフォームして作ったベストや洋服、その他、小物、バッグ、それは200から300種類ぐらいあります。

一つ、珍しいものがあるんですが、これは、ミカンの産地ですのでミカンの皮を使ったピールアートっていうものを作っております。ユズなんかで作りますと、家の中に置いてくだけで香りがいいという。みんなで食べた後の白い皮までバラの花にしたりしております。これはちょっと違うんですが、カンボジアに、たまたまカンボジアの父と言われる方が友人でして、たまたま王妃、シハヌーク殿下の息子さんの奥さまなんです、この方とちょっと縁がありまして直接にシルクのスカーフや子どもさんが作った小さなカボチャなどを送ってきてまして、それを販売してお金を送るっていうことが私たちの、これがボランティアと思って少し協力しております。あと、私の『蔵ら』のお食事です。日替わり『ひる膳』。全て500円です。

さんまずしも500円。一応、お味噌汁も磯ものの貝などを使ったお味噌汁で、皆さん「安過ぎる」とか言われるんですけど、それはお世辞だと思っています。今、フキノトウが採れてるんですが、朝採れたフキノトウの天ぷらも付いてます。そんなふうに皆さんの声でやっております。これは私が賞をいただいた、『いづこいし』っていう石なんですけど、これは、皆さん、体験で、今、おひなさま作りをしております。これが、松崎のゆるキャラのまっちーちゃんです。桜餅のサクラの葉は松崎が80パーセント以上生産しております。なまこ壁が200軒ほどありますので、なまこ壁の洋服を着たまっちーちゃんです。

●『四つのチャ』で活動

私たちは、チャンスが大事にしよう、私の考えですけど、チャンスがあったらチャレンジ、チャレンジをマンネリになったらチェンジ、そして女性が多いのでチャーミングでいこうっていうことで、『四つのチャ』っていうことで活動しております。それから、若い移住者の人たちが農業したり、お花作ったり、いろいろ、パン作りやケーキ作りやそういう人たちのアンテナショップとしても、コーナーを作りまして販売しております。『蔵ら』の会員など協力者は本当に皆さん1人も辞める方もなく、高齢になって卒業する卒業っていうところではあるんですが、一応、今まで平均年齢73だったのが、今70になって、若い方が50代の方が2人ほど入りましたのでちょっと若くなっております。福祉が主ですが、観光地ですので観光、それから商工、中で本当に私たちは高齢者でも町のために今まで子ども孫もみんなお世話になった町のために頑張ろうっていうのがテーマです。キザですけど国でいただいている年金は、みんな国のお給料だと

現在の居場所としての「蔵ら」は

- ① 高齢者の手づくり民芸品や小物の販売
- ② 地元の食材を使った食事処
- ③ いづこいしなどの小物づくり体験



高齢者が働く場・憩いの場であるとともに自分たちも時給500円を目標に展開しています。

- | | | |
|---|--|-------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. チャンス 2. チャレンジ 3. チェンジ 4. チャーミング | | <p>4つの「チャ」で
まちづくりに取り組んでいます。</p> |
|---|--|-------------------------------------|



町のマスコットキャラクター「まっちー」

「黄金の生糸」と先人の道具が織りなす珠玉の輝き



カンボジア・マリー王妃が母国の恵まれない女性と女兒の自立と生活向上の支援のため、織物技術の教育指導し製品化したアンコール王朝時代のクメールシルクを作品販売

思って恩返ししようっていうことで、それがテーマになっております。

火曜日の高齢者の『ものづくり介護』は、今、私が人形のボディーを作りまして、それで自分を作ろうっていうのをやりましたらとても人気がありまして、毛糸で頭付けたり、男の人がズボン履かせたり、この人形作りがとても皆さん楽しいらしくて、今、やっております。こんなふうには、これはポプリ作りですね。針を持たない方は、針を持つのが嫌って方はこういうふうにはポプリを作ったり、リボンで結ぶだけですのでやっております。これは、『いづこいし』を作ったところですね。大勢で作りました。今年がちょうど、合計しますともう18年目になりますので、このカルチャー教室も13年目になります。

それで先日とてもすごいチャンスが訪れまして。手作りのできる人が多いんですね、和裁、洋裁、小物作り。それを認めまして世界のバービー人形の着物を作ってほしいという依頼がありました。それをみんなです。今、チャレンジしてるところですが、とてもいいものができるまで楽しんでます。日本の着物で作ってほしいっていうことで。これが世界に羽ばたくんじゃないかなって、みんな夢を持って作っているんで、もう100着ぐらいできました。まだ販売はしてないんですけど、皆さん、今、見に来ていただいています。左の上はちりめんで作ったおすしです。これも、外国の方がとても喜んで求めています。



下は招き猫で、昔、着た、絵羽の羽織ですね、そういうものを使ってやっております。あとは、こちらのうさぎさんなんですけど、これもふるさと納税になってまして、結婚式の方たちにはプレゼントされて東京のほうへも送ったりしております。上のバービー人形になっております。この『蔵ら』というのは、名前は蔵、結局、古民家を利用しているものだから蔵なんですね。その蔵に、松崎の地方の言葉で「いいだら」、「そうだら」って「ら」付けるんですね。その言葉を付けて『蔵ら』にしました。それから、鬼瓦に恵比寿、大黒が付いているのでもう少し頑張ってみようかなと思います。



本当に簡単ですけど、こんな感じです。